

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：ロネ・シェルフィグ
出演：キャリー・マリガン/ピータ
ー・サースガード/ドミニ
ク・クーバー/ロザムンド・
バイク/アルフレッド・モリ
ーナ/カーラ・セイモア/マ
シュー・ピアード/エマ・ト
ンプソン/オリヴィア・ウィ
リアムズ/サリー・ホーキン
ス

17歳の肖像

2008年・イギリス映画
配給/ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
100分

2010(平成22)年3月26日鑑賞 ソニー・ピクチャーズ試写室

👁️👁️ みどころ

1961年のイギリスはダサイ国で、憧れはパリとは何とも意外。他方、魅力的な年上の男性に魅かれる16歳の女ゴコロは万国共通? 「教育」は大切だが、どんな教育から何を学ぶかが最も大切。さてヒロインが描いた17歳の肖像とは?そして、めくるめく日々を過ごす中、ヒロインが学んだ教訓とは?

受賞は逃したものの、アカデミー賞主演女優賞にノミネートされたみずみずしい16歳のヒロインに注目!

魅力的なヒロイン像は?

本作の主人公は16歳の女子高生ジェニー(キャリー・マリガン)。時代は1961年で、舞台はロンドン郊外のトウィッケナム。イギリスには1962年にビートルズが登場したが、それ以前の60年代初頭のイギリスは、16歳の少女にとっては退屈で面白味のない国だったらしい。ジェニーは父親ジャック(アルフレッド・モリーナ)と母親マージョリー(カーラ・セイモア)の一人娘だが、父親は娘の教育に熱心でオックスフォード大学への入学が絶対らしい。

ジェニーはそんな父親の期待に応えるべく真面目に勉強をしていたから学業優秀で、担当のスタップス先生(オリヴィア・ウィリアムズ)のクラスでは彼女の成績はラテン語を除いてはピカイチのようだ。しかし、16歳というのは最も多感な年頃だから、彼女が憧れるのは文化の香りがプンプンするフランス。したがって、フランス語の勉強は自分の意思で頑張っているし、学業とは別にチェロの練習にも精を出しているから、とにかくジェニーは頑張り屋。ところが、そんな彼女が17歳の誕生日を迎えようとする中、何とも劇

的な変化が・・・。

受賞は逃したが、こりゃ必見！

本作はイギリスのザ・オブザーバー紙で知られるジャーナリスト、リン・バーバーの自伝の一部をロネ・シェルフィグ監督が映画化したものだが、本作の注目点はなんといっても16歳のヒロイン、ジェニーを演じたキャリア・マリガン。もっとも、映画を観る限りで、16歳にしてはしっかりしすぎているのでは？と思ってプレスシートを見ると、キャリア・マリガンは1985年生まれというから、本作が製作された08年当時22歳。この年では女子高生役はちょっと無理があるのでは？と思わないではないが、キャリア・マリガンがちょっとおませな16歳の優等女子高生を見事に演じている。

「新たなオードリー・ヘップバーン」の呼称はちょっと大げさすぎるが、そんな彼女は第82回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた他、本作は作品賞、脚色賞にもノミネート。残念ながら受賞はならなかったが、こりゃ必見！

デイヴィッドは理想の男？それとも？

ジェニーのボーイフレンドは同級生のグラハム（マシュー・ピアード）だが、彼はどう見ても冴えない男。16歳の女子高生が年上のステキな男性に憧れるのは当然だが、雨の中ずぶ濡れ状態で立っているジェニーに、「君のチェロが心配だ。チェロだけ乗せるから車の脇を歩いて」と声をかけてきた男デイヴィッド（ピーター・サースガード）は理想の男、それとも？

ジェニーはきっと厳格な父親から「見知らぬ男の車の中に乗り込むなどもっての外」と教えられているはずだが、やわらかい物腰でウィットに富んだそんな誘い方をされると、つい・・・。車の中に乗り込んだ後の会話もしゃれているから、ナンパのテクニクとしてデイヴィッドのセリフは大いに参考になるはずだ。ここからデイヴィッドとジェニーの淡い交際（？）が始まるわけだが、デイヴィッドの友人で美術品取引仲間のダニー（ドミニク・クーパー）やその恋人ヘレン（ロザムンド・パイク）の仕事ぶりや遊びぶりはどこことなく怪しげ。しかし、そんな大人の世界がジェニーに魅力的に見えたのは当然だろう。16歳の自分を大人の女性として扱ってくれるうえ、音楽会やナイトクラブそして絵画のオークションでのセリ体験などは、ジェニーにとってめくるめく体験の連続だったことはまちがいない。

さあ、そこで問題はデイヴィッドは理想の男？それとも？ということだが、さて・・・。

厳格な父親も、なぜかデイヴィッドの前では・・・

娘に対してはトコトン厳しく妥協を許さない父親ジャックも、なぜかデイヴィッドの巧みな会話にかかるとチョロイところが面白い。第1は、音楽会へのお誘いとその後のディ

ナーへのお誘いだが、見事なデイヴィッドの会話術の前に、ジャックは11時半帰宅オーケーの返事をさせられることに。第2は、何と泊まり込みでのオックスフォード大学への訪問。これについても、デイヴィッドはオックスフォード大学の恩師であり有名作家のC・Sルイスを紹介すると、ジャックのスケベ心(?)をくすぐったため、ジャックはこれもオーケー。そして第3は、パリ旅行。いくらデイヴィッドの言葉に甘いジャックでも、ダニーとヘレンを伴った4人のパリ旅行を承諾させられるほどバカではないと思ったが……。

あんなにタバコを? 処女喪失の瞬間は?

日本は今や愛煙家にとって極めて住みづらい国になっている。つまり、どこもかしこも禁煙とされ、路上での喫煙も罰金とされるほどだ。ところが本作をみていると、ジェニーのように真面目で優秀な16歳の女子高生が平気でスパスパとタバコを吸っているから、その姿にビックリ。こりゃ一体どうなってるの?

また、日本では女子の性の初体験年齢がどんどん下がっており、中学生ともなればほとんどが非処女らしいが、その点イギリスでは?性に対する女の子の興味は日本でもイギリスでも同じだろうが、ジェニーは家庭教育がしっかりしていることもあって、17歳の誕生日までは処女を守ると決心しているらしいからえらい。もっとも、そんな「宣言」をしているということは、17歳の誕生日でそのチャンスを待っているということだが、今やそのお相手が冴えない同級生のグラハムから年上の魅力的な男デイヴィッドに移ったことは明らかだ。さて、本作が描くジェニーの処女喪失の瞬間とは?

なぜこんな原題を?

今や日本の学級崩壊は世紀末の状況らしい。そして、ロースクールや大学教育のみならず中高教育と小学校の教育現場は何ともひどい状況になっている。それに対して大ナタを振るおうとしている橋下徹大阪府知事の手腕に私は大いに期待しているが、さてその成果は?

本作の邦題『17歳の肖像』は意味シンだが、原題は『An Education』つまり「教育」だから何の変哲もないもの。たしかにオックスフォード大学への入学が絶対だという議論を日夜交わしている父親と娘の姿を見ていると、『An Education』というタイトルもわからないではないが、それでは何の面白味もないのでは?なぜ本作の原題を『An Education』としたの?それは17歳の誕生日を挟んでジェニーが短い期間で受ける激動の日々をみればよくわかるはずだ。

最近の新人弁護士をみていると、授業で聞いたことはよく覚えているからそれなりの知識は有しているが、からっきしダメなのは知らないこと、未知の領域に対して切り込む能力。基本的に弁護士はいつも知らない領域をイチから勉強し調査して切り込んでいかなければならない仕事だから、その能力が不足しているのは由々しき大問題だ。本作の魅力的

なヒロインであるジェニーは、学業が優秀なうえフランス語やチェロまで学んでいるから、良き教育を受けていることは明らかだが、本作の原題『An Education』がイメージする教育とは？本作を正しく理解するためには、ストーリー展開と共にそんな原題の意味をしっかりと考える必要があるのでは？

本作から学ぶ教訓とは？

1985年生まれ的女優キャリア・マリガンが16歳の制服姿の女子高生ジェニーを演ずるのは少しムリがあるが、ヘレンの助けを借りてドレスアップし大人の女の仲間入りを果たした後のジェニーの姿はキャリア・マリガンの実年齢どおりで実に魅力的。しかし、大人の世界には大人の世界特有のドロドロしたものがあるはず。だって、あんな高級車に乗り、贅沢三昧な生活を送っているデイヴィッドは一体どんな仕事でカネを稼いでいるの？また、その仲間のダニーとヘレンも雰囲気はリッチだが、さてその生業は？

高級車、高級レストラン、高級プレゼント、そして大人の服装と大人としての楽しい時間。女子高生として勉強勉強の抑圧された生活に比べれば、それらが楽しいのは当たり前だが、ジェニーはデイヴィッドと付き合っていればホントに毎日そんな生活を送ることができると考えていたの？頭のいいジェニーなら当然それを真剣に考えなければならぬはずだが、ある日デイヴィッドから求婚されたジェニーはそれどころではないことになってしまったから大変。日本では成年年齢を20歳から18歳に引き下げるとともに女性の婚姻年齢を16歳から18歳に引き上げようとする法案が検討されているが、さてイギリスでは？そして、デイヴィッドから求婚されたジェニーとその両親の対応は？

さあ、映画後半に登場してくるそんな劇的な展開はどんな結末に？そして、ジェニーやあなたが本作から学ぶ教訓とは？ネタバレらしをするわけにはいかないので、本作のそんな見どころはあなた自身の目でじっくりと。

2010(平成22)年3月29日記